

第3回講演会 「これからの資格試験について考える」 レポート



平成 24 年 10 月 5 日(金) 午後 1 時 30 分～午後 4 時 30 分
東海大学校友会館 望星の間



晴天に恵まれた10月5日、霞が関ビルにおいて、「これからの資格試験を考える」をテーマに、全国検定振興機構主催による第3回講演会が行われました。

この講演会は、当機構の活動のひとつでもある、検定試験の振興と検定業界の情報交換を目的としたもの。今年度で第3回目ということもあり、講演の開始前、休憩時間に参加者の皆様が挨拶や言葉を交わすシーンも、例年以上に活発に感じられました。

そんな雰囲気のなか、講演会は当機構理事長・池田央のご挨拶からスタート。

続いて演壇に立った文部科学省生涯学習政策局 生涯学習推進課課長・平林正吉氏からは、文部科学省のこれまでの検定に対する取り組みや、全検の活動に対する謝辞とともに、生涯学習社会の実現における資格・検定試験の重要性についてのお話がありました。

基調講演では、キャリアカウンセラーである中瀬路子氏が、「安心して学べる信頼できる検定とは」と題した講演を。特に、女性を中心としたカウンセリング、アドバイスで活動を続ける中瀬氏ならではの、資格・検定試験の現状分析と、提案がありました。

また、テスト理論などで教鞭を取り、項目応答理論（IRT）などで数々の論文のある東北大学教育情報学研究部・教育部教授 村木英治氏からは、コンピューターを応用した試験の現状やメリット、今後の展開・課題について講演され、特に今後の資格・検定試験においてはIRTによる解析や問題作成の重要であるという点を力説されていました。

講演を聞く参加者のみなさんは熱心にメモを取るほか、活発な質疑応答も行われ、当機構の活動が定着しつつあることを肌で感じることのできた1日となりました。



文部科学省生涯学習政策局
生涯学習推進課課長 平林 正吉 氏



キャリアカウンセラー
中瀬 路子 氏



東北大学教育情報学研究部
教育部教授 村木 英治 氏

来賓挨拶



「生涯学習と検定試験への取り組みについて」

文部科学省生涯学習政策局
生涯学習推進課課長 平林正吉氏

社会全体の利益に
資する資格、
検定試験であるためにも
「自己評価」と「情報公開」
が重要

全国検定振興機構、第3回の講演会の開催にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。特定非営利活動法人である全国検定振興機構におかれましては、日頃から利用者や受験者の視点に立ちながら、検定全体を見据えた活動にご協力いただいているところです。この場を借りて感謝を申し上げます。

検定試験は、チャレンジ精神の涵養であるとか、自己の学習度の到達度の確認であるとか、継続的に学習意欲を喚起するとかですとか、あるいはもちろん教養の増進であるとか、受験者の年齢や経験や受験の目的に等々によって、現在、様々に普及していると思います。

私共は、学習成果を適切に生かすことができる社会=生涯学習社会の実現を目指しているわけですが、そういった面からも、検定試験はきわめて重要だと認識している次第です。

文部科学省では、平成22年の6月に『検定試験の評価ガイドライン』を取りまとめており、23年には『自己評価シート』を民間主導で取りまとめていただいている。こういった普及啓発を行いながら、検定試験の自己評価や、情報公開の促進といったことに取り組んできました。

検定試験に関しては、社会の期待は大きいと思っています。現在、文部科学省では、第二期の『教育振興基本計画』の策定を検討していますが、その中にも検定試験の社会的通用性を高めるため、検定事業者における自己評価・情報公開の取組をさらに普及させることなどが、目標として掲げられる見込みです。こうしたことで検定試験の質の維持、向上を図ると同時に、信頼性を確保し社会的な重要性を高めることは、社会全体の利益に資するものと考えております。

もちろん、民間の自由な経済活動でありますので、自己評価の実施について、強制力があるものではありませんが、是非その趣旨をご理解の上、ご協力いただけるようお願い申し上げます。

最後になりますが、この講演会を実施する全国検定振興機構と池田理事長はじめ、関係者の皆様のご尽力に感謝と敬意を表したいと思います。あわせまして、検定試験業界の、今後ますますの活性化、ご発展を祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。





「安心して学べる信頼できる検定とは」

キャリアカウンセラー
中瀬路子氏



中瀬と申します。現在、キャリアカウンセラーとして、主に女性や学生の就労相談、資格検定ライターをしております。具体的には、インターネットの「AllAbout」というサイトで資格ガイドを務めており、当初、女性のための資格情報ガイドということで5年、そして現在、通信教育ガイドということで2年ほど活動を続けています。また、ゴールドマン・サックスと都の社会福祉協議会東京ボランティア・市民活動センターによる「ひとり親就労支援プロジェクト」の就労アドバイザーを務めています。

私自身、進学や就職活動、出産など、人生の節目節目で検定、資格試験を受けてきたひとりです。今日は、受検生のひとりとして、代表としてお話をさせていただきたいと思います。

最近の学び事情と 安心して学べる環境 についての考察

総務省の「平成23年社会生活基本調査」によれば、「学び活動」を行っている人は、4017万人。10歳以上の“行動者率”では、35.2%となり、10人中3~4人が、なんらかの学び行動を行っていることがわかります。5年前に同じ調査が実施されており、行動者率はほとんど変わらないのですが、年代別に見てみると、10代・シニア層が、5年前を上回っている状況です。

学んでいる内容については、パソコンなどの「情報」、「英語」が上回っており、介護関係は横ばいと続きます。これは、IT化ですとか、グローバル化、高齢化社会といった時代を反映しているものと考えられますし、最近の受検者数を見てみても、この傾向はさらに強まっていると思います。

こうした、10代やシニア層の増大を受けて、「安心して学べる環境」というものを考えたとき……、私たちは震災以降、絶対安心という心情にはなれない前提があるのですが、受検者を不安にさせない、不安を軽減してあげる。これが、最善策ではないかなと思っています。

受検者がどのような不安を持つかというと、「わからない」「続かない」「できない」です。試験がどういうふうに実施されて、どういう人が受けて、受かつ



女性が望む 「学びスタイル」とは キーワードは「WILL」

ているのか。これが「わからない」。今はホームページで情報も公開しているでしょうが、10代やシニアに向けて、わかりやすい表現になっているか、これを再検討することも必要でしょう。

「続かない」という不安に関しては、丁寧なサポートを提供することだと思います。メールや電話、今ですとTwitterやFacebookといったさまざまなメディアもありますし、検定というと「毎日コツコツと」という苦痛のイメージもあるのですが、それが少し楽しくなるような環境……たとえば、最近では任天堂の3DSといったゲーム機や、スマートフォンで学習できるようなツールも増えているようです。実際に、スマートフォンユーザーの50%が学習アプリを入れているという調査結果もあります。

「できない」という不安に関しては、レベルの確認手段を提供することで、それを取り除くことが可能ですね。代表的なものが過去問題の提供です。書籍だったりインターネットだったり。レベルチェックでは、模擬試験などにより、今自分が、何ができる、何が足りないのか、どうしたらできそうか、そうしたことがわかりやすい仕組みになっていればいいのではないかと思います。

つまるところ、不安を取り除く=受検者が、「できる!」と思う、そういう気持ちにさせることこそが、安心して学べる環境なのだと思います。

加えて、検定の信頼性も重要です。公平、信用、継続性などが、受検者にとって、信頼できる検定かどうかの判断基準になっているようです。

受検者が「できる!」と思うこと。これをCANだとすれば、信頼できる検定はMUSTです。多くの検定事業者さんでは、さまざまな方策や自己評価への取り組みの結果、こうしたことが実現できていると思いますが、一方で、これからは、それだけで受検者数を伸ばすのは難しいとも考えます。

そこで注目されるのが女性層なのですが、ご存知のとおり、購買決定の8割を女性が握るといわれています。実際に、さきほどの行動者率を見ても女性のほうが男性を上回っていますし、伸び率も高くなっています。また、50%以上のOLが資格・検定に興味を持っているという結果も出ています。

では、どうすればということですが、近年の女性誌からキャリアアップ系の特集を拾ってみると、昔は「自分磨き」などであったキーワードが「女子力アップ」へと変化していることに気づきます。たとえば、「〇〇のようになりたい」という、未来に向かっての変化が明確に描けることが、学びの原動力になっているのです。職場で身近な方が資格・検定試験を受けて、どう変わったとか…あるいは講師の方でもいいのですが、どう素敵なのかといったことが、学びのモチベーションに直結します。「〇〇のようになりたい」という、〇〇の部分に入る言葉を具体的に提示してあげると、女性の方の行動につながるということです。

これは、紅茶の資格を取った方のお話ですが、「一年前には上下スウェットで家にいました。それが、紅茶の資格を取ってお菓子教室を開くようになって変わったんです」というときの表情を見て、私自身、学びの原動力って本当にすごいなと思わされました。つまり、具体的な変化を描くことが、こうした原動力につながっていうのだと思います。



以上をまとめると、これからの資格・検定については、MUST=信頼できる検定というのは受検者にとって必須条件であり、CAN=安心して学べる環境というのは、工夫次第でできることだと思っています。さらに、明確な目標、これがWILLというキーワードなのですが、学ぶことによってこう変わるんだ、変わられるんだといいというのがわかりやすい資格・検定であってほしい。そう、思っています。

最後に、それぞれの検定実施団体が、合格者や受検者のネットワークを作つて情報発信しているとのを見る機会が増えてきました。ただ、それだけではなく、実施団体の皆様がより大きなネットワークを作り、情報発信してくれることを期待しています。というのも、私もいろいろな検定を受けてきたわけですが、ひとつの資格を取った方が、次の資格を取ることにつながります。ですので、全国検定振興機構を含め、NPOですとか、公的機関を内外問わずに巻き込んで、学ぶことがこんなに楽しいんだということを、情報発信していただければと思います。現在はFacebookなどのSNSもあります。勉強したことで変わる、変わったことを、お互いで認めあう場を、共感できるネットワーク作りをしていただければ、業界全体も盛り上がるのではないかなと思っております。

本日はご清聴、ありがとうございました。

質疑応答から

Q

これからの検定の集客に対して、
どうプロモーションしていったら
いいのでしょうか？

A

多額のお金をかけてコマーシャルを打つのは、一時の効果はあるかもしれません、あくまで一時性が高い。むしろ、運営スタッフが、丁寧に説明、宣伝していくことが必要だと思います。口ケットスタートは無理かもしれませんが、合格者のひとりとしてPRしてくれるような人材を集め、育てる必要だと思います。また、資格・検定に関しては、会社内でも、勉強していることを隠す雰囲気も見られます。さきほどご提案したネットワーク活動のように、学びを共感できる仕組み、社会づくり心掛けることも大切だと思います。



「Computer-based Testing (CBT) と これからの資格試験」

東北大学教育情報学研究部・教育部教授

村木英治氏

コンピューターを使った
CBTが
これからのテストの
在り方を変える

東北大学で教えています村木と申します。「教育情報」というのですが、Eラーニング、E テスティング、インストラクショナルデザインといったものを教えております。サイコメトリックス（テスト理論）が私の専門になります。

現在のテスト環境においては、Computer-based Testing (CBT／コンピューターを利用したテスト) が一般化しています。最初にその有用性を示したのが ETS で、50 年代以前、マークシートによる大量のスコアリングを可能としました。採点の自動化に伴い、選択式の客観テストが一般化され、そのなかで、解答データの信頼性を確保するための分析手法として「古典的テスト理論」が確立されます。

こうした、テストと集計分析をコンピューターで行う CBT をゼロ世代とすると、その後、紙で行うテストをコンピューターに置き換えた第一世代、被験者の応答に基づいて出題をコンピューターが選択していく第二世代、そして、被験者の学習の軌跡を含めた連続変化を測定するような第三世代、知識や推論機能を持ったシステムにより知的測定を行なおうという第四世代へと、CBT は発展しようとしています。

これら CBT のメリットは、個人の能力に合った個人に特化されたテストができることがまず挙げられます。個人化されていることにより、より少ないテスト項目で効率的な試験の実施が可能です。また、試験結果の処理や通知が迅速化されることも特徴です。さらには、実際の試験自体をコンピューターでテストを行うため、試験の日程や場所に制約されません。これは、被験者を 1 年に 1 回しかテストを受けられないといった制約から解放します。

効率化だけでなく、CBT は、テストそのものを変化させます。たとえば、リスニングといったテストを含む語学は、コンピューターと非常に相性がいい。さらに、医学、建築といったビジュアルを含む分野では、マルチメディアを駆使した出題が可能となるなど、こちらも高い相性を見せます。こうしたことに加え、今後は、個人履歴を効率的に活用したり、「知識より技術」を問うパフォーマンスアセスメントの分野、さらには、被験者がどういう強みや弱みを持っているかといった個人診断——認知的診断といった可能性を、CBT は秘めています。



近年の CBT に欠かせない キーワード 項目反応理論（IRT）



さて、さきほど「被験者の応答に基づいて出題をコンピューターが選択する」第二世代型を挙げましたが、これは、コンピューター適応型テスト（CAT）と呼ばれ、初期の TOEFL などでも使われていました。CAT は、項目反応理論モデル（IRT）によって実現されていますが、CAT、IRT は、50 年代には提唱されていて、特に IRT は、「古典的テスト理論」に対し「現代テスト理論」と呼ばれます。

古典的テスト理論では、そのときの問題の難易度（内容）、そのときのテスト被験者のレベルによって、自分の得点が集団での相対的尺度によって評価されます。これに対し、現代テスト理論では、絶対的な尺度による評価が可能となっています。具体的には、IRT では、テストの結果を得点で推し測るのではなく、テスト項目そのものの○×を解析の対象とし、各被験者の回答パターンから、潜在的な特性値を求めていきます。これにより IRT は、原理的には、環境に関わらず、その被験者の「能力」を求めることができるのです。このことは、簡単に言うと、母集団が異なっても共通の尺度で能力が測定できるということであり、あるいはまた、出題項目が異なっていても、共通の尺度で能力測定ができる、ということです。

当たり前のことですが、CAT では、出題される項目は、個人によって異なります。ですので、CAT は、異なる出題であっても絶対的評価を求められる IRT なしには成立しないということができます。

IRT の解析手法は、テストの実施以前や実施後に、そのテストが妥当であるかといったことも判定可能です。たとえば、ある能力を基準にすれば、そのテストが難しすぎるとか、簡単すぎるとかの客観的評価が可能です。このことは、テストの実施において望み得る難易度、精度のテスト設計を構築できるほか、レベル設定の適切化に対し正当であるという論理的根拠を確立できることにもつながります。また、被験者の得点分布や平均点、合格点に関し、ある程度の事前情報も可能としてくれます。

CBT の実際と これから可能性、課題

CBT を使ったテストでは、さまざまな出題、解答形式が可能となっています。たとえば、出題への数値解答を、コンピューター画面上のスライダーで選択するもの。あるいは、複数の音声をそれぞれ再生させ、ラジオボタンで正解を選択するもの。また、「並べ替え」といった、自分で組み合わせを作成するとか、チャートのようなものを完成させるといった、動的な解答を求める出題も、コンピューターによるテストなら可能となります。さらに、表計算ソフトのテストであれば、知識でなく実際の作業を出題し、被験者の技術を確認するといったこともできます。

このように、CBT はさまざまな可能性を秘めているわけですが、問題点、課題もあります。まず、現状のほとんどのテストが、多肢選択型か正誤のテストであったりと、紙のテストを単にコンピューター上でやるというものになっている。これは、なんとか変えていきたい。また、（個人情報という観点から）試験の機密管理に費用がかかる、インターネットでテストを実施する場合、どうやって個人を認証するのかといった問題もあります。さらには、テスト実施団体が IRT を理解すること、また、数多くありそれぞれ一長一短のある IRT の個別手法を、どうやって選んでいくか、そういう問題もあります。



今後の可能性としては、テストの実施や解析以外での CBT としては、テスト項目をプールするだけではなく、項目のアウトライン（ベースプール）から問題を自動生成するといったアイデアも出ています。また、採点でもコンピューターによる自動化を進める動きもあり、アメリカでは実際に「わかりやすい文章を書くテスト」で導入されている例もあります。作文採点の自動化では、人間の採点による主観を排除でき、採点プロセスの信頼性向上や採点過程の説明性が確保できるなどのメリットがあります。ただし、日本では「わかりやすい文書を書く」という学問自体が存在しないため、導入が難しいけれど、チャレンジする研究者も出てきています。あるいは、先ほど、第三、第四世代のお話をさせていただきましたが、過去の学習、テストに関する蓄積情報を使うことにより、たとえば、こういった本を読めばいいのではないか、こうした勉強をすればいいのではないか。そうしたサジェストションをすることも可能になります。

このように、CBT を資格・検定試験に導入するメリットはお分かりいただけたと思います。が、一方で、先ほども申し上げたとおり高いハードルがあるのも事実です。そういう意味で、産・学・官が一緒になって、日本の新しいテストというのを作りあげていく必要があると思っています。

質疑応答から

Q

CBT を導入する場合、
採算性の問題が発生すると思うのですが、
いかがでしょう。

A

将来 CBT の導入を考えている方は、項目プールを作る
ことから始めてみてはいかがでしょう。というのも、
ある程度プールが完成すると、新しい問題を作る必要がなくなるんですね。みなさんはおそらく問題作成にお金をかけて
いると思うのですが、さきほど申し上げたとおり、IRT を使
うと、項目プールの妥当性や、絶対評価が可能となります。
IRT 自体はペーパーの試験にも適応な技術ですから、今すぐ
CBT を導入するのではなくとも、将来の CBT 導入を見越し
て、項目プールの作成や IRT を適応することから始めるのが
いいのではないかでしょうか。